アサヒグラフ

6·16

大正12年1月23日第3種郵便物認
通巻2532号(毎金曜日発行)　昭和47年6月16日
昭和24年3月28日国鉄特別扱承認雑誌第17

事件直後鮮血の中にふき飛んだ女性の靴を拾う空港従業員(WWP)

テルアビブ空港の惨劇

(イスラエル)

——日本人ゲリラの乱射事件——

特　価
２００円

鮮血生々しい現場にエラザール参謀総長らイスラエル軍首脳がかけつけた（オリオンプレス）

テルアビブ空港の惨劇

日本人ゲリラの乱射事件

アラブ・ゲリラと先鋭な武装対立をつづけるイスラエルの玄関、テルアビブのロッド国際空港で五月三十日夜（日本時間では三十一日早朝）、赤軍派に属する鹿児島大学農学部学生岡本公三（24）ら三人のゲリラが待合室に自動小銃と手投げ弾を乱射、女性十三人を含む二十四人を殺害、七十六人を負傷させた事件は、全世界を動転させた。事件直後、アラブ・ゲリラの過激派パレスチナ解放人民戦線（PFLP）は、五月初め同空港でベルギーのサベナ航空機を乗取ったゲリラ二人が射殺されたことに対する報復行為であると発表、事態が明らかになるにつれて、PFLPと赤軍派との連携が明らかになった。被害者はプエルトリコからの巡礼者が多く、死者のうち十四人、負傷者中三十七人がプエルトリコ人。イスラエル人の死者八人、負傷者は三十七人であった。

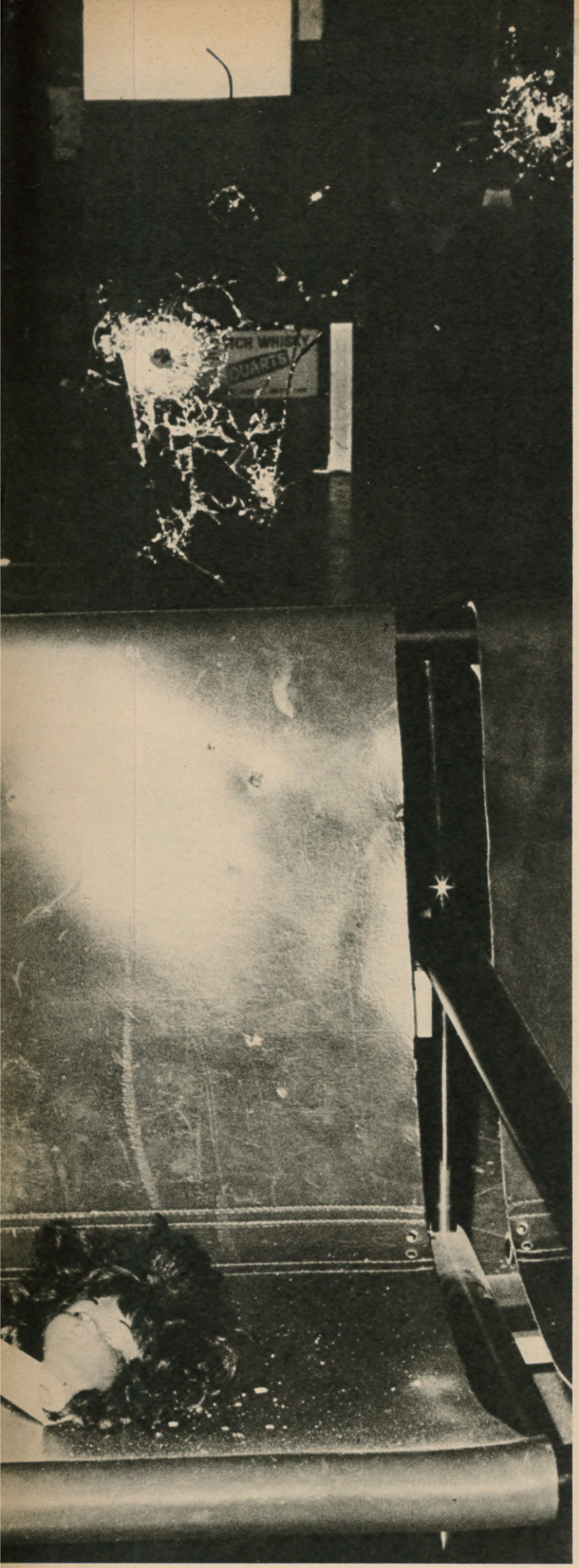
アサヒグラフ　6月16日号
©朝日新聞社　1972　本誌掲載の写真・記事は無断転載を禁じます

ロシア的豪華に彩られた苦汁の取引（カラー）
ニクソン訪ソは成功だったか……3
テルアビブ空港の惨劇／日本人ゲリラの乱射事件…11
《さそり》のように刺す女
梶芽衣子に見る〝脱かよわき女性〟像……21
東京探検⑯／最高裁判所大法廷……28
動詞による現代日本文明論㉔／啖呵をきる……34
連載・医療を考える④（カラー）
機械支配はすすむ……35
シエラネバダを越えて（カラー）
シカゴ―サンフランシスコ50時間の汽車の旅……42
日本美を描く⑭／柳川／田崎広助（カラー）……50
沖縄の職人たち⑯（カラー）
ドタテ織り／徳吉マサさん……54
にっぽん百景㊾／大分県九重町（カラー）
温泉天国ただいま売出し中……59
なぜこの町に原子力発電所を……
新たな公害におびえる地域住民たち……70
成仏できぬ毒ガスの亡霊
大久野島（広島県）にただようイペリットの恐怖…79
パイプのけむり／B玉①／園伊玖磨……88
「私の海外旅行」ほか……90
宝石のささやき⑭／珊瑚（カラー）
海の宝と化したナポリ王……92
キ次元（カラー）……97
わが家の夕めし／入江泰吉（カラー）……98

写真　（21～25）長谷出版写真部員　（35～41）島田興生　（52～53）三浦弘　（59～65）西村久義　（70～77）矢野嘉之　横山利次　丹野清志　勝山泰佑　（79～83）吉田敏昭　（98）青井竹三郎　**カット**・大川一夫
★**海外トピック**は休載しました

鳴　叫喚　連射されるチェコ製ＶＺ58自動小
げた人形がころがっている（オリオンプレス）

到着客ホールは一瞬のうちに血の海と化し
銃　手投げ弾の爆風　乗客の荷物は散乱し

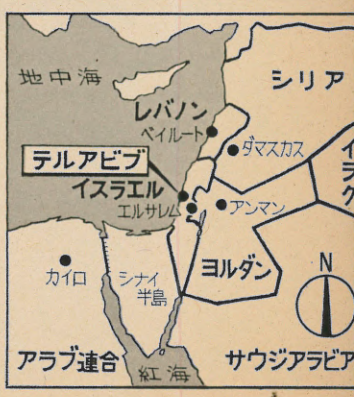


負傷者があわただしく病院にはこばれていく　イスに残された人形の首　窓ガラスには弾痕が生々しい（WWP）

非常呼集されて犠牲者の遺体を運ぶイスラエル軍兵士（WWP）

惨劇直後　現場を調べるイスラエル軍首脳部　とび散った血痕がまだかわいていない（オリオンプレス）

事件後数時間を経過しても　到着客ホールの血だまりは　まだ生々しかった(オリオンプレス)



赤軍・PFLP 連携の軌跡

高木正幸

事件は現地時間五月三十日午後十時三十分（日本時間三十一日午前五時三十分）、パリ発、ローマ経由フランス航空機132便がテルアビブのロッド国際空港に到着して、税関で自分の荷物を受取った直後に発生した。ローマから乗ってきた「東洋人風」の三人は荷物を受取ると、いきなりチェコ製VZ58自動小銃と手投げ弾を取出し、待合室にいた二百数十人の群衆に向け、約二百四十発の自動小銃弾を乱射、手投げ弾六発を投げた。外電は三人が「黙々と」行なったと、無気味さを強調した。群衆は逃げまどい、約百人がバタバタと倒れ、ある人は手投げ弾でバラバラになってふっ飛んだ。

死者二十四人。負傷者七十六人。「戦場のよう」「屠殺場のよう」と外電が伝えるこの惨劇の主役三人のうち二人は、自ら投げた手投げ弾がはね返り、あるいは仲間の弾丸に当って死んだが、三人がもっていたパスポートから日本人とわかり、逮捕された生残りの一人は「赤星軍」と名乗った。

「赤星」は、日航機「よど」号ハイジャックや連合赤軍事件で注目される赤軍派の、関西系組織革命戦線の機関紙『赤い星』をもじったものと推定された。

生残りの一人は、熊本県生れの鹿児島大生岡本公三(24)とわかったが、三人とも関西の赤軍派であることを自供したと、特派員は報じる。また死んだ二人のうち一人は、昨年九月以来中近東に渡っている三重県出身の京大工学部建築科学生安田安之(25)と見られている。

そして、かねてから赤軍派との連携が伝えられていたパレスチナ解放戦線―PFLPはこの事件について、五月はじめ、ベルギーのサベナ航空機を同空港で乗取ったアラブ・ゲリラのうちの二人が、射殺されたことへの報復であり、同組織の突撃隊によって行われた、と発表したのだった。

またも、と思い、やはり、と思う。十四人の無残な死を生んだ連合赤軍事件によって、闘争における軍事という思考の末端肥大的飛躍を暴露した赤軍派は、PFLPと手を結んで実践に移した「世界同時革命」戦略の矛盾と破綻を、国外の空港での無差別殺りく、犬死、逮捕によって、再びみせつけたのである。

世界同時革命論

北朝鮮　キューバ　パレスチナ　おいらの夢は果てしなく
ロマンの花を咲かせます――赤軍派の歌に、こんな文句があるという。

昨年十一月、赤軍派とPFLPが共編した『アラブゲリラと世界赤軍』（京大出版会出版）の中で、赤軍派はその歌の文句をこういいかえる。「われわれは世界革命を語るとき、インドシナ、中国、朝鮮ばかりか、イランド、パキスタン、セイロンなどの闘争との連帯をも求めるし、さらにパレスチナ革命とアラブ革命との戦士的連帯をも積極的に求める……PFLPが明確に分析するように、パレスチナ革命単独の革命はあり得ないし、帝国主義との激烈な闘争を通じてしか、革命は達成し得ない」。

社、共などの既成左翼はダメ、新左翼八セクトもダメ、全共闘・ノンセクトラジカルもダメ。日本帝国主義体制に立向う新しい戦略は、帝国主義列強を破壊出来る弱い環を世界中にみつけ、武装ゲリラ戦により攻撃すること。一九六八、六九年の街頭闘争、大学闘争の大敗北の総括の中から、共産同＝ブント内の関西系を主体とする過激派が分裂してつくった赤軍派の、この「世界同時革命」論は、国内での革命闘争の行詰り、挫折から生れた理論でもあった。

結成間もなくの大菩薩峠での大量検挙を「階級闘争を世界革命戦争として実現せんとした前段階武装蜂起闘争の敗北」（『アラブゲリラと世界赤軍』）とし、「よど」号ハイジャックによる幹部の朝鮮民主主義人民共和国入りを「（大菩薩峠での）敗北を国際根拠地の建設と世界革命戦争の実体化として遂行した闘争」（同）とする赤軍派は、「建党、建年遊撃戦＝都市ゲリラ」路線の実践として、金融機関襲撃や爆弾作戦を繰返した。

幅広いアラブへの共感

一方、アラブ民族の解放と、中東からのイスラエル―ユダヤ主義の駆逐をスローガンに、毛沢東思想をかかげ、ハイジャック、テロなどの武装闘争路線を強く打出していたPFLPとの連携の動きが、七〇年ごろからはじまり、昨年二月には、いわばPFLPとの連絡役として幹部クラスの元明大生重信房子が本拠地のベイルートに渡った。

また、赤軍派の歌の文句にある、朝鮮民主主義人民共和国やキューバの社会主義革命、ゲリラ闘争への憧憬は、赤軍派ばかりでなく、新左翼の活動家全般にかなり広く存在するものであった。そして、朝鮮民主主義人民共和国やキューバでの社会主義革命闘争が一段落した現在、ゲリラ活動がなお息づいているアラブ・ゲリラへの共感が急速に高まり、多くの活動家がアプローチしようとした事実は以前から少なからず伝えられていた。

重信房子を頼ってベイルート入りした活動家は、十人単位、あるいは百人単位ともいわれ、パレスチナ難民を支持するという形で医療業務に参加する学生や、イスラエルのキブツで研修している若者もいると聞いた。いわゆる過激派に対する警察のきびしいチェックにもかかわらず、テルアビブ空港襲撃事件で

犯人が使用したチェコ製VZ58自動小銃と弾倉を持つ空港職員（オリオンプレス）

岡本はヨーロッパ各国への観光目的ビザで去る二月二十九日、ＰＦＬＰの幹部とともに羽田から出国、ベイルートの安アパートに泊り、近くの小さな村にあるＰＦＬＰの基地で三週間にわたって訓練をうけ、一度下見にイスラエル入りした後、襲撃の日、ベイルートからローマに行き、イスラエル入りした。

岡本がベイルートに向ったという二月二十九日は、連合赤軍が、立てこもって警官隊と銃撃戦を展開した軽井沢・浅間山荘が〝落城〟した翌日であった。国内で展開された連合赤軍のはじめての軍事ゲリラ闘争と、国外での反帝国主義ゲリラ闘争への参加のための出発が、世界同時革命を実践する計画的な共同歩調であったのかという推理も、なし得なくはない。

人民解放戦争理論と矛盾

しかし、赤軍派は、大菩薩峠事件、「よど」号ハイジャック事件で打ちのめされ、連合赤軍事件で決定的な打撃をうけたはずであった。獄中にとらわれ、あるいは朝鮮民主主義人民共和国に亡命している幹部が「いまだ、労働者階級の中にはいる」（公判廷での塩見孝也元議長の発言）など、次々と自己批判しているのをみるとき、当初の赤軍派の実態はすでに失われたとみなすことが出来る。

岡本らの行動は、赤軍派の「世界同時革命」の理論を、古典として忠実に実践したとも、連合赤軍後の内部分裂や組織弱体化に対する、失地回復の捨身の作戦とも受取れる。だが、そのいずれにしても、理論先行の末端肥大的思考の飛躍がもたらした、破局的行動としか、いいようがない。

何よりも問題なのは、明確な敵と不明確な敵を区別せずに行なった、無差別な殺りくである。うたうところの「人民解放戦争」「大衆の中で生き、大衆のために、大衆とともに戦い」（『アラブゲリラと世界赤軍』）の、革命、解放の理念とは、明らかに矛盾するものでないのか。

日本人三人のみを「突撃隊」としてつかった、ＰＦＬＰへの疑問もつきない。この事件については、空港待合室で無差別射殺してサベナ航空機乗取り失敗に報復するものだったのか、あるいはイスラエル国内へ侵入して、要人をねらうなどの高度な意図をもったものだったのか不明だと、特派員は報じるが、「これまで内ゲバも市民を殺すこともなかったＰＦＬＰが、イスラエル人民からの反発を考え、日本人に行動させた」「救出を〝保証〟しながら、裏切った」などの疑問に、納得出来る回答をＰＦＬＰ側が出すことは、困難であるにちがいない。

まだつながっている導火線

二十四人を殺した、テルアビブ空港での日本人青年三人の行動は、どの立場をとっても、肯定し得る論理を欠く。だが、と私はやはり考える。彼らに〝狂気〟のレッテルをさらに分厚くはって、罵倒し、さげすんだところで、どうにもならない。そんなことでことが片づくとしたら、もうとっくに、こんな事件は起らなかったはずだと思う。

やみくもの弾圧におしひしがれ、警察側からの世論操作的過大情報のままに、すべてに〝狂気〟のレッテルをはられ、疎外の極点に追いやられている活動家たちが、大衆的なエネルギーの高揚を期待出来ぬなかで、権力のカベを打破るために、論理を飛躍させ、武器と行動をエスカレートさせることは、運動としての必然がある。その可能性が今後はないと、だれが断言出来るだろう。

それはまさに、「一九四八年エルサレムの近くのデール・ヤシンの村でユダヤ人ゲリラによって数百人の農民、女、子どもが虐殺された。パレスチナ人は二十年以上、苦しんできた。見捨てられた人々が強烈な行動に訴えた時、結果だけ見て批判するのは単純すぎやしないか」（その故にこの襲撃は〝デール・ヤシン計画〟と名づけられた＝『朝日新聞』6月3日朝刊・パレスチナ人記者の発言）というアラブ側の論理と、はなやかな米中、米ソ首脳会談が中東、インドシナ問題をなんら解決することなく体制補強に貢献しているといった現実に二重写しにされ、かれらのいらだちをかきたてているとはいえないだろうか。

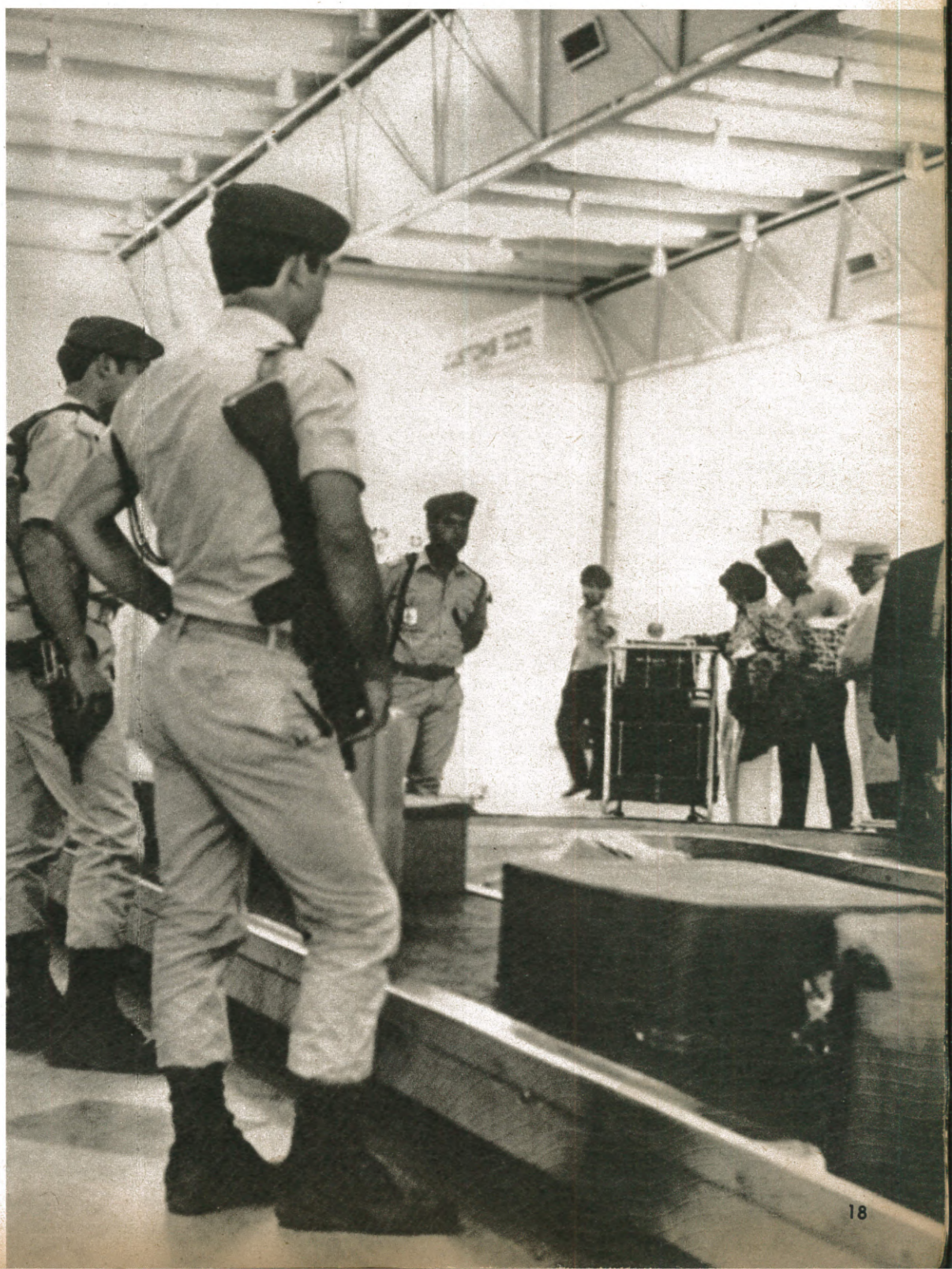
日本人青年三人が大量殺りく事件を起した数千㌔の彼方に、体制支配の強まる日本からのびる、細い導火線をみるのは、私だけであろうか。

（朝日新聞首都部）

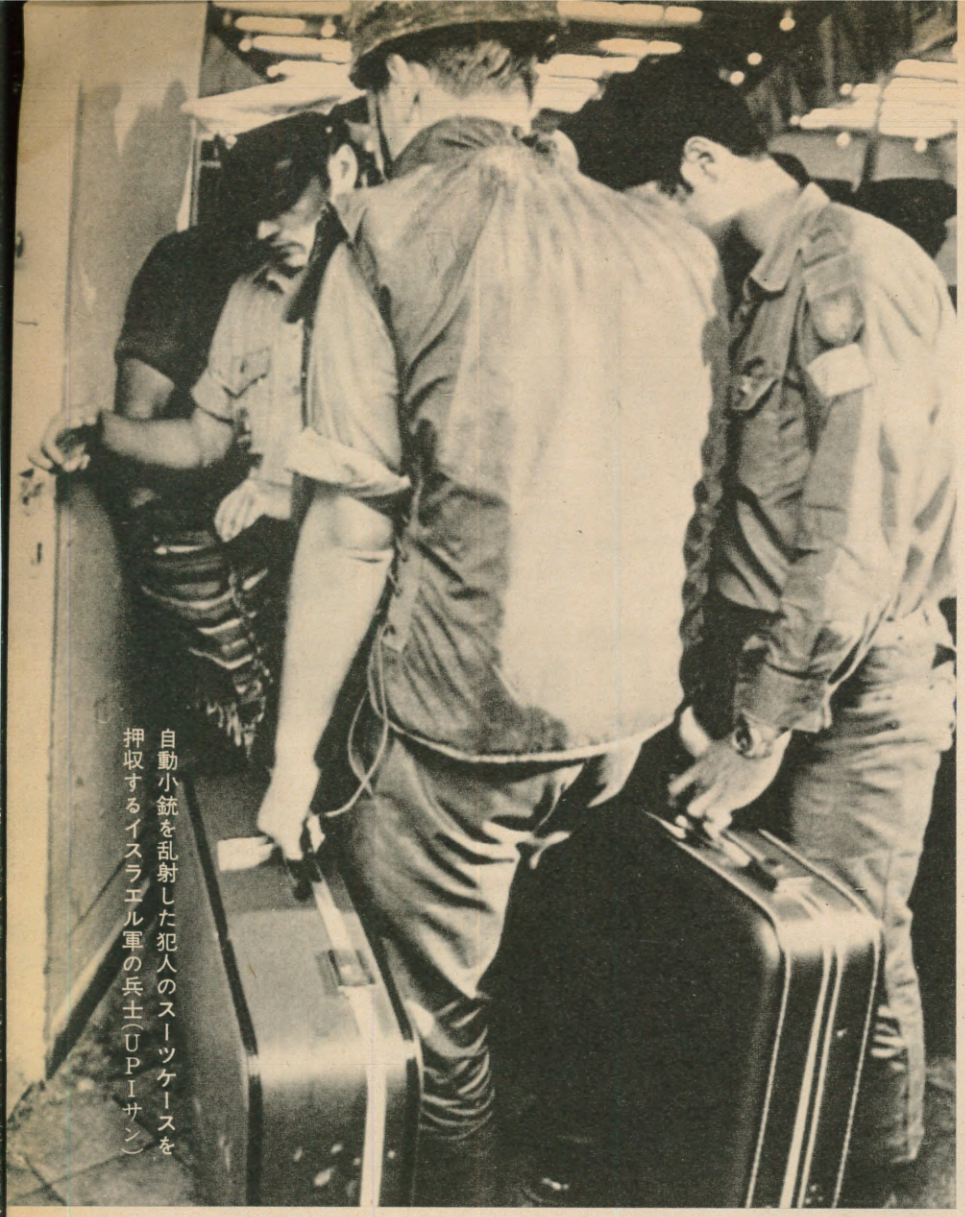
ＰＦＬＰとは

パレスチナ解放人民戦線の略称。イスラエル建国でパレスチナを追われたアラブ人が、パレスチナ解放をめざしてつくったゲリラ組織、いわゆるアラブ・ゲリラのひとつ。マルクス・レーニン主義に毛沢東理論を加えて一九六七年一月に結成された。勢力はおよそ七千人といわれ、指導者はジョルジュ・ハバシュ。実践を重視しアラブ・ゲリラ内の最過激派。六七年六月の中東戦争以後、「アラブの正規軍にパレスチナ解放の力はない」としてゲリラ活動に転じた。航空機乗取りを得意とし、六八年七月イスラエルのエリアル航空機乗取り以来、現在まで十六件の乗取りを敢行している。

七〇年秋のアラブ・ゲリラとヨルダン政府軍の戦闘によって大きな打撃をこうむり、さらにはアラブ・ゲリラ内の穏健派との対立もあって、勢力を衰退させつつある。最近では、今年二月のルフトハンザ機乗取り事件をめぐって、ＰＦＬＰ内部にも分裂が生じているとも伝えられる。



テルアビブ国際空港では　事件以来　軍隊が出動して厳重な警備態勢に入っている　事件の再発を防ぐため　荷物へきびしい目を光らせる（ＷＷＰ）



自動小銃を乱射した犯人のスーツケースを押収するイスラエル軍の兵士（UPIサン）

テルアビブのテル・ハショメル病院の救急車に収容された日本人テロ犯人の死体（WWP）

テロ事件にまきこまれた犠牲者たちは　次々とテル・ハショメル病院に運ばれた（UPIサン）

死んだ二人の身元が簡単に割れなかったという事実も、幅広いアラブ・ゲリラへの共感と参加の裏付けとしてとらえられよう。

このような動きの裏には、ヨルダン政府の弾圧が強まり、レバノン政府側との衝突も伝えられる一方で、パレスチナ解放闘争の中心組織であるPLO（パレスチナ解放機関）などから、その過激路線を批判され、異端者扱いされているというPFLP側の、戦列強化のさそいかけもあったとみられる。昨年秋、アラブ・ゲリラを撮影した『赤軍―PFLP・世界戦争宣言』の上映前後に、PFLPの幹部が来日し、全国各地で支援を訴えたことも、そのあらわれであった。

PFLPの指導者ジョルジュ・ハバシュ博士は『アラブゲリラと世界赤軍』の中で、赤軍派にこうアピールを送る。「世界的レベルの革命勢力が単一の全世界反帝国主義戦線を統一することが非常に重要である」。赤軍派とPFLPの連携は、「世界同時革命」「ゲリラ戦」の基盤に立つ、疎外集団同士の相互補強的連合であった。

浅間山荘からパレスチナへ

テルアビブ空港をおそった偽造旅券名「ナンバダイスケ」「トリオケン」「スギザキジロウ」のうち、生残った「ナンバダイスケ」こと鹿児島大農学部三年生岡本公三は、「よど」号乗取り事件で北朝鮮に渡った赤軍派の岡本武(26)を兄にもつ。

岡本公三は、熊本市の私立高校を出て、京都で二年間浪人生活を送ったのち、鹿児島大学へ入った。デモに参加し、一時はべ平連に属したこともあるが、「よど」号乗取りの兄と、赤軍派の機関誌『赤軍』第4号（六九年十一月七日付）に影響をうけ「世界同時革命」に共鳴した、といわれる。昨年十一月、赤軍派活動家が『赤軍―PFLP・世界戦争宣言』の映画をもって鹿児島に宣伝、オルグにやって来たときには、喫茶店での会場設営に奔走し、その後、パレスチナ解放戦線の映画を仲間と鹿大農学部の教室で上映したこともあるという。

現地警察への自供によると、

沖縄復帰記念

《純金製》金貨メダル

〈完全限定発売〉

純度保証
政府刻印入り

全国有名デパート
時計貴金属店にて
発売中!!

■規格：《純金製》直径35㎜・27ｇ ￥50,000限定数5,000個

沖縄復帰記念

《純金製》切手メダル

〈完全限定発売〉

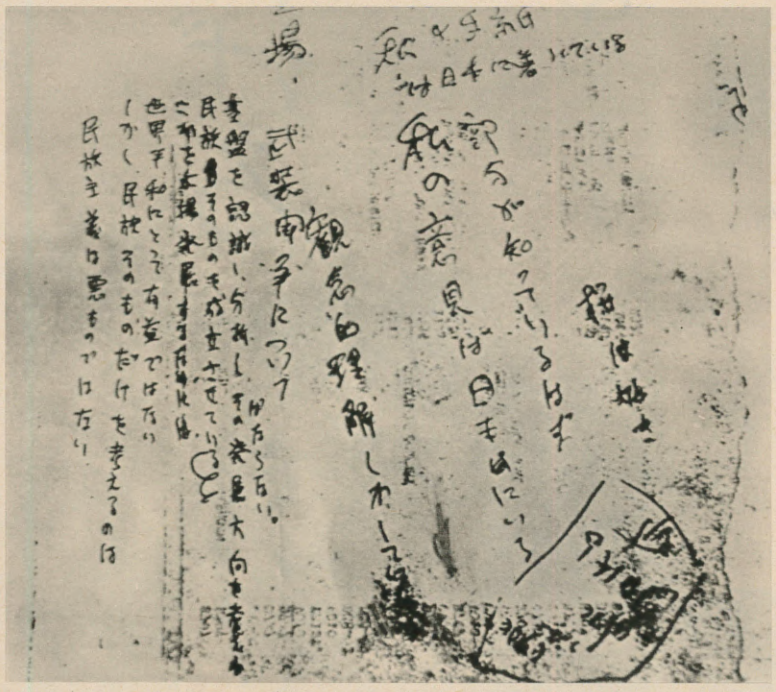
純度保証
政府刻印入り

規　格

純プラチナ製 31㎜×26㎜　15ｇ￥75,000 限定数 1,000個
純　金　製 31㎜×26㎜ 13.5ｇ￥25,000 限定数 5,000個
純　銀　製 31㎜×26㎜　15ｇ￥ 2,000 限定数10,000個

創業明治30年
松本徽章工業株式会社
〒111 東京都台東区元浅草1－12－2☎東京(842)6161

同事件で死んだ二人の日本人のうちの一人　破られていたパスポートの写真を復元したもの　京大工学部建築科学生安田安之（25）とみられている



写真上は空港で逮捕された難波大助こと鹿児島大学生　岡本公三（24）　岡本は「民族主義」についての所感をしたためた紙片（写真左）を持っていた

テルアビブで起ったテロ事件に対して　イタリアのミラノの五月三十一日在イタリアのイスラエル人学生が抗議のデモを行なった　イスラエル国旗の弔旗が掲げられている（ＷＷＰ）

アサヒグラフ
大正十二年一月二十三日第三種郵便物認可
編集長 伊藤道人 発行所 朝日新聞社
東京本社 郵便番号一〇〇 東京都千代田区有楽町二ノ三 電話(212)〇一三一 振替 東京一七三〇番
大阪本社 郵便番号五三〇 大阪市北区中之島三ノ三 電話(231)〇一三一 振替 大阪五五〇番
西部本社 郵便番号八〇二 北九州市小倉区砂津一ノ一二ノ一 電話(31)〇一三一 振替 福岡一七六〇番
特価 二〇〇円

仲代達矢

さわやかな香りのヘアトニック**パンテーン**

PANTENE

パンテーンは、フケ,かゆみをなくし、抜毛を予防するパンテノール(スイス ロシュ社)を配合した優雅な香りのヘアトニックです

ブルー・レッド,油性・非油性：300ml, 180ml, 95ml

製造元 **日本ロシュ** ROCHE 発売元 **シオノギ製薬**

Printed in Japan 凸版印刷株式会社印刷